絵はことばを裏切る―
ニコラ・トリゴー『日本殉教史』（1623/1624）の挿絵とテクスト ―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小俣ラポー, 日登美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000383

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

論 文 *ARTICLE*

絵はことばを裏切る
―ニコラ・トリゴー『日本殉教史』（1623/1624）の挿絵とテクスト―
When Images Betray Words: Texts and Illustrations in Nicolas Trigault's *History of the Martyrs of Japan* (1623-1624)

Hitomi Omata Rappo 小俣ラポー日登美

はじめに

ニコラ・トリゴーによる通称『日本殉教史』は、日本のキリシタンの殉教史を形成する典拠の一つとして、日本ではキリシタン研究においてしばしば引用されてきた書物である[1]。本書は、まずミュンヘンにおいて1623年にタイトルの若干異なるラテン語版が二パターン刊行された後、翌1624年にフランス語版が出版された。ラテン語版の正式名称は、『日本でのキリスト教の勝利、もしくは1612年から1620年にかけておこったキリスト教に信仰に対する深刻な迫害について（*De Christianis apud Iaponios Triumphis: sive gravissima ibidem contra christi fidem persuctione exorta anno MDCXII usq. ad annum MDCXX.*）』と言う[2]。一方で、翌年出版されたフランス語版のタイトルは、少し趣を変えて『日本殉教史：1612年から1620年まで（*Histoire des Martyrs du Japon: depuis l'an DCXII jusques à MDCXX.*）』となっている。明らかに、日本での通称はフランス語版のタイトルに拠る（本稿では、紙面の都合で『日本殉教史』の呼称を便宜的に用いたい）。両書が有名である理由は、内容もさることながら、その豪華な挿絵によるところが大きい。ラテン語版には、全17点、フランス語版にはラテン語版の挿絵を組み直した全6点の挿絵が含まれ、日本の戦国時代末期のキリシタンの様子を伝える貴重な画像資料として、これまで認識されてきたからである。

一般に挿絵は、狭義には図書、雑誌、新聞など情報を持つテクストの内容を補うために挿入される絵（もしくは図）を指し、テクスト本文と相互補完的な関係にあると考えられている[3]。従来文学研究においては、挿絵はパラテクストとして、テクストすなわち書物の本文を読む際に大きな影響を与える要素であると認識されてきた[4]。そうした関係にあって、挿絵は時にはテクストに寄り添うばかりではなく、西洋中世写本の研究者である松田隆美の言葉を借りれば、「読書行為に先立って視覚的に認知され」、時には読者に「内容に対する先入観を形成」させ、なおかつ「原作者の意図に反して読みを限定」さえする[5]。つまり、挿絵自体も、テクストの補助的な役割を超えて、時にはテクストの内容を忠実に反映させることなく、読者の読み方を規定してしまうことすらある。挿絵は、単に補完物ではなく、テクストそのものであるかのように分析されるべき対象なのだ。

本論考がとりあげるトリゴーの『日本殉教史』は、まさにテクスト本文と挿絵の内容が呼応していない好例である。この書では、挿絵とテクストが、相互補完どころか、互いが互いの内容を裏切る関係にある。だからといって、一連の挿絵が創作物として他の作品と切り離され、独個の浮遊した存在となっているわけではない。書物における挿絵が、パラテクストと呼ばれ書物の内容に積極的に関与する存在であるなら、メッセージ性を持つ主体として挿絵同士も、相互の関連性を持ちうる。これは、テクストであれば、その関連性は間テクスト性として分析対象となる。間テクスト性は、文字によるテクストであれば具体的には引用もしくは剽窃という形で顕れるが、挿絵に関してはこれまで図像学的な関連性という形で指摘されてきた。例えば、挿絵版画が与えた図像学的影響が、物語絵のアレゴリックな創造活動など近世のバロック絵画において顕著だった事は、木村三郎の一連の研究で証明されている[6]。

トリゴーの『日本殉教史』に見られる図像は、単に前後に出版された日本関連書籍との関連が指摘されるばかりでなく、同時代のヨーロッパの日本とは必ずしも関係しない宗教関連書籍との関連も見いだされる。そこで、本論文では、挿絵の美術的価値の判断、表現面での巧緻の審査、真贋の鑑定はその専門家に委ね、主にテクストと

の関係から挿絵を論じ、更に同時代の書物の挿絵群を意識しながら図像学的な位置づけを目的とする。また、本文のテクストとの関係を通じて見える挿絵の創造性（フィクション性）も指摘した上で、本書の内容や執筆背景についても考察する。

1. トリゴー『日本殉教史』の内容概略とその構成

『日本殉教史』は、ラテン語版・フランス語版ともに、扉絵、献辞、序文「読者へ（ラテン語 Ad Lectorum / フランス語 Au lecteur）」に続く本文および補遺で構成される。本文は、「リーブル（Livre 直訳すると本）」と呼ばれる五つの部分で構成される（本稿では紛らわしいため「部」とする）。各部は細かい章で分割されており、その構成はラテン語・フランス語で一致する。一部には二七章、二部には一七章、三部には二三章、四部には一八章、五部には二四章ある。本文の内容は、第一～四部と、第五部および補遺の二つの部分に大別できるだろう。なぜなら、前者と後者で執筆の時期が大幅に異なり、全体としての原稿が作者トリゴー自身に推敲されないまま出版されたからである。前半部分は、トリゴーがヨーロッパ滞在中に執筆され、おおむね 1612 年から 1617 年をカバーしている（一部ではそれ以前の時代の回想も入る）。後半部分の第五部は、1618 ～ 1619 年にかけてゴアで執筆され、1614 ～ 1619 年の出来事が語られている。1620 年の出来事は、補遺で断片的に言及されるに留まる。

第一部では、まず日本の地理的な位置関係が中国との比較でなされ、その政治体制が説明される。そして、キリスト教の迫害に転向していた体制の変化がどのように表れてきたのかが分析の対象となっている。また、迫害の予兆として、木の中から十字架の形が出現したという超常現象の逸話も語られるが、これについては扉絵における図像表現にも影響しているため、後述する。迫害の状況は、一つ一つのケースに一章が充てられて完結するように描かれている。本全体で、一つの大きな流れを語るのではなく、各章ごとにまとまった逸話としている構成であるために、17 世紀を通じドイツ語圏を中心に隆盛していた日本殉教演劇に翻案されやすかったのではないかとと考えられる[7]。

第二部では、最初に有馬において迫害が継続された理由が書かれ、その後に、第一部同様に、主に有馬における個別の殉教者の死の様子が各章で展開される。二部では第七章まで有馬の話が続き、第六章において、「王都江戸（regia Yengo/la ville Royale d'Yendo）」における「皇帝」の代替わりと、迫害の模様が語られ、その後続の章では江戸と有馬の話しが両方語られる。

第三部の冒頭には、「皇帝」が新たにキリスト教徒に対して厳しい対応をとった原因が説かれる。それに続く各部では、江戸や有馬だけでなく、豊後、筑前、博多、長崎などの九州の各地に広がった殉教の逸話が、各章で語られる。また、九州だけでなく、都（京都）、伏見、堺での出来事も語られる。二一章では、フィリピンへの日本のキリスト教徒の追放が語られ、二二部では高山右近のマニラでの死が取り上げられる。第三部最後尾の二三章では、日本における殉教ではないが、日本出身者でフィリピンに渡りアウグスティヌス会の修道士となったニコラス神父が、徒歩でローマへ行こうと試み、結局モスクワで壮絶な殉教を遂げた逸話が語られている。日本での事例ではないが、近世の世界宣教の波に乗って、このような遠方まで移動した日本人もいたという記録として貴重である。

第四部でも、各章で日本全国の様々な殉教の出来事が語られる。部末に近い二六章では大阪の陣が言及され、二七章では「公方様（Cubosama、ここでは徳川家康を指すだろう）」の死が語られる。第四部末尾の一八章は、ラテン語は全編唯一の無題の章となっている一方で、フランス語版では、「本全史に関する考察」と題される。つまりは結論である。内容的には、ラテン語・フランス語にも大きな差は見られない。まず日本の殉教の模様が、古代教会の時代の殉教になぞらえられる。更に、「異端（カトリックにとってはプロテスタント）」の脅威にさらされるヨーロッパのカトリック教徒にとっても、日本の殉教者にあらわれる信仰が模範となると締めくくられ、『日本殉教史』をヨーロッパのカトリック教徒が読む意義が語られる[8]。当初本書は第一部から第四部までで完結する予定であったため、この位置に本の意義を説くような結論が見られるのである。

ゴアにおいて執筆された第五部は、第一～四部の原稿と対照して執筆されたわけではないために、多少重なる内容が、特に 1615 年と 1616 年に関しては見られる。その重複に対しては、筆者のトリゴー自身も意識しており、読者に謝ってすらいる[9]。しかも、敢えて第一部で前置きとして説明された日本についての説明を第五部の冒頭で繰り返し、第五部が一つの読み物としても成立しうるように構成されている。そのために、『日本殉教史』の全体の構成は、時系列的に語られる第一～四部の後に、新情報が含まれるものの情報が一部重複する独立した読み物が接続されている状態となっている。この不均衡な構成を説明するために、第五部の最初には、他の部にはみられない「序言」が再度おかれている。その「序言」では、第五部が新たに書き加えられるようになった経緯が説明されている。実際に、第五部は他の部と比較してもかなり長く、ラテン語版もフランス語版も 100 頁をゆうに超

える[10]。また、第五部冒頭に「序言」が特別におかれていたにも関わらず、末尾に本全体の結論が設けられているわけではない。

最終部の第五部が 1619 年 3 月の記述で終わっているにも関わらず、本書の副題に『1612 年から 1620 年にかけておこったキリスト教に信仰に対する深刻な迫害について』とある理由は、本書巻末の補遺の部分に含まれた情報が 1620 年までの情報を含むからである。補遺の最初には、「1617、1618、1619、1620 年の日本の教会の状況」という小文があるが、これは固有名詞をなるべく挙げた殉教者の事跡をほぼ羅列している部分である。この部分の文責がトリゴーにあるのかは不明である。さらに、長崎にいたイエズス会の日本管区長マテウス・「コボ」神父（原文では、ラテン語版 Matthei del Cobo/ フランス語版 Matthieu du Cobo）から、マニラのフィリピン管区長バレリオ・デ・レデスマ（Valerio de Ledesma）神父にあてた 1619 年 10 月 19 日付けの書簡の翻訳が掲載されている[11]。ちなみに、手紙の差出人コボ神父は、ポルトガル人のイエズス会士マテウス・デ・コウロス神父（Mateus de Couros, 1568-1633）の間違いである[12]。同時代人に東アジアで活躍したスペイン人ドミニコ会宣教師でフアン・コボ神父（Juan Cobo, ca. 1546-1592）がいるために、混同されたのだろう[13]。この書簡は、イエズス会のカルロ・スピノラ神父（Carlo Spinola, 1565-1622）および、アンブロジオ・フェルナンデス神父（Ambrósio Fernandez, 1551-1622）が、牢獄に収監された上で、飢えと寒さのために亡くなった事を伝えている。実は 1620 年当時亡くなったのはフェルナンデス神父だけで、スピノラ神父は 1622 年のいわゆる元和大殉教で、他の 24 名のヨーロッパ人宣教師、30 名の日本人信徒とともに火刑に処せられて亡くなっている。書簡の筆者のコウロス神父は、監獄内の収監者の消息が途切れたために、両者の死亡を確信したのだろう。カルロ・スピノラは、海外宣教から生まれた大勢の殉教者の中でも、16 世紀半ばのイエズス会が特に顕彰の対象とした重要人物である[14]。『日本殉教史』の本文テクスト末尾に添えられた手紙の引用が、スピノラの徳とその殉教を悼み讃える文章で締めくくられていることからも、改めて近世のイエズス会におけるスピノラの重要性が伝わってくる。

最後に 1612 年から 1620 年までの犠牲者の名前のリストと、宣教拠点（宣教師の住居であった場所）が羅列されている。最期に、フランス語版にのみインデックスが頁番号なしで 26 頁加えられている。

2. ラテン語版とフランス語版の異同

以上のような構造と内容は、基本的にはラテン語版とフランス語版で共通する。差異としては、まず冒頭に挙げた本の題名と献呈先が挙げられる。献呈先が異なるのは、テクストの言語が異なれば想定される読者も当然変わってくるため首肯できる。そのために、本の冒頭に掲げられた献辞の内容も異なる。ドイツ語版は、選帝侯ヴィルヘルム五世（Wilhelm V., 1548 − 1626）とその後継者マクシミリアン一世（Maximilian I., 1573-1651）に献呈されている。一方で、フランス語版は、「王妃へ（À la Royne〔Reine〕）」という曖昧な献辞で始まる。フランス語献辞の内容には、ここで言及される「王妃」がカトリックの君主の娘であり、二人のカトリックの君主の姉妹であり、なおかつカトリック教会の長兄たるフランス国王の母たる人物と褒めそやされている。フランス語版出版時の実際のフランス王妃は、アンヌ・ドートリッシュ（Anne d'Autriche, 1601-1666）だったが、この当時まだ彼女は世継ぎを産んではいなかった。しかも、彼女はイエズス会とは結びつきが弱く、むしろイエズス会のライバルであったフランシスコ会のフランソワ・フェルナンデス神父（François Fernandez, ca. 1567-1653）を告解師として、長年起用していた。一方、マリー・ド・メディシスは、実際の王妃であった義理の娘の立場を尊重せず、フランス王妃の称号を自分の権威のためにも保持し続けていた[15]。したがって、トリゴーの『日本殉教史』の献呈先は、マリー・ド・メディシスと考えられるだろう。また、フランス語版の献辞は、トリゴーではなくフランス語翻訳者のピエール・モラン神父（Pierre Morin, 1562-1625）による。

献呈の直後に設けられた一般読者にむけた序文の内容も、ラテン語版とフランス語版で微妙に異なる。フランス語版の序文は、タイトルページにあしらわれた扉絵についても言及しており、フランス語版がラテン語版とは異なる扉絵を持つ理由の説明として読むことができる。特に、ここで言及される扉絵とは、本全体の扉の部分だけではなく、各部の最初に設けられた扉絵も指している。

ラテン語版とフランス語版は、挿絵にも異同が認められる。ラテン語版挿絵は、アントワープを拠点にドイツ語圏から東欧にまで印刷業を一族で担っていた著名なサドラー家のラファエル父子（Raphael. I Sadeler: 1560/61-1628/1632, Raphael. II: 1584-1627/1632）により描かれた。ラファエル父子は、トリゴーのために 1616 年頃から働いており、トリゴー自身の指示を受けてラテン語版の図像を作成していた[16]。本内部の挿絵には、版画家の署名が見られない。しかし、扉絵に「図像は、サドラー家による（"Iconibus Sadelerianis"）」とあることから、扉絵だけでなく内部もサドラー家とその工房の作品であると考えるのが自然である。一方、フランス語版は、扉絵の右下の署名から、ミシェル・ヴァン・ロション（Michel van

Loshom, 1601-1647）作と木村三郎により特定された。ロション自身は、著名な版画家とは言い難いが、パリのイエズス会とつながりの深かったセバスチャン・クラモワジーの出版業のために図像を提供しており、聖人伝やカトリックの宗教書を手がけていた[17]。フランス語版の挿絵も、ラテン語版の挿絵同様署名はないが、フランス語版とラテン語版は、扉絵以外は図像的にほぼ同じモチーフが描かれており、なおかつラテン語版の挿絵数点を一枚に集約するような総括的仕事が施されているため、これらの図像の作成は分業ではなく、まとまって管理された可能性が高い。したがって、扉絵と同じくロションかもしくはその工房が担ったと考えられるだろう。

挿絵の数は、ラテン語版で計 17 点が、テクストの内容に対応する場所へ挿入されている。一方で、フランス語版では、第一・二部を除き、各部の冒頭に、部の中で言及される出来事の挿絵を集約した図像が扉絵として挿入されている。その関係性を整理すると、以下のような図となる。このように、第一・二・五部においては、ラテン語版に見られる挿絵がそのままフランス語版に写されている。しかし、第三・四部では、ラテン語版の複数の画像が、フランス語版では（一部の図像は省略されながら）一つの絵柄へとまとめられている。また、第五部の図像はほぼ同じものであるものの、フランス語版では部の冒頭に移動させられて、第五部の扉絵として機能している。

フランス語版においてこのような図像の集約が施された理由は、版画の数を少なくさせて出版費を節約させる目的があったかもしれない。しかし、書籍の扉絵という芸術に、特にフランス語圏では当時特別な役割が期待されていたことも忘れてはいけない。『日本殉教史』のフランス語訳者であり、またフランス語版の献辞文と序文の作者であるピエール・モランは、書籍の扉絵に求められる役割について、『日本殉教史』の前年に出版された書籍の序文でこのように語っていた。

> 巨大で広大な砂漠の中で、神の御前にいると想像なさい。そして、その瞑想では、この世界の始まりからの全ての人間が現れてきます。世界は、あらゆるものの偉大な母である大地から出でて、現在の生の劇場となっているのです…この本にみられる扉絵のように[18]。

ここでは、「世界はすなわち劇場である」というルネサンス期以降のヨーロッパに頻繁にみられる比喩が用いられている。この表現は、単に当時の社会で演劇に期待された役割以上の意味合いを持っている。もともと、「劇場（ラテン語 Theatrum/ 英語 Theatre/ 仏語 théâtre）」とは、ギリシャ語テアオマイ（theaomai）の語源である「見る」に由来し、16 世紀の辞書が示すように、まず第一に「見るもの」、スペクタクルのことを示していた。しかし、（西欧の）人間が認知できる世界が格段に広がった 16 世紀の書物においてこの比喩が用いられる時、それは一瞥で世界を網羅して把握できるような、全能の神のような目が

部番号	ラテン語版（1623）	フランス語版（1624）	図像の内容
1	19 章、p. 75	19 章、p. 93	刀による斬首刑、および生首、遺体
2	15 章、p. 169	15 章、p. 211	キリスト教徒に囲まれた焚刑
	12 章、p. 231		2 人の斬首刑と一人の焚刑
3	3 章、p. 204	扉絵へ接合、p. 227	樹木からのつるし上げの刑
	16 章、p. 250		コの字型の磔
4	4 章、p. 300		棒たたきの拷問
	4 章、p. 305		額への十字の焼き印の拷問、刀による斬首刑、木の棒で足を挟む拷問
	5 章、p. 315	扉絵へ接合、p. 368	額への十字の焼き印の拷問、刀による斬首刑
	6 章、p. 317		20 人の生首の城外での獄門
	6 章、p. 319		裸形で裁かれるキリスト教徒
	6 章、p. 321		刑吏に包囲されるキリスト教徒
	6 章、p. 323	扉絵へ接合、p. 368	手足をしばられ重しをつけられてつるし上げられる拷問
	6 章、p. 325		手足の切断、木の棒で足を挟む拷問
	7 章、p. 329		生首の獄門、棒に押し付けられて階段を下るキリスト教徒、棒で叩かれる信徒たち
	7 章、p. 333		刀による斬首刑、バラバラに切断される遺体
	8 章、p. 362		木の枠に結びつけられる拷問
5	5 章、p. 464	扉絵、p. 468	磔刑図

強く意識されている[19]。この比喩の背景には、唯一無二の神がめくるめく地上の出来事をあまねく把握しているというキリスト教的で神聖かつ荘厳な世界観が横たわっている。これは、拡大した世界の多様性を、“それでもその世界も神の視界にあるものである”として受け入れようとした、西欧近世なりのグローバル感覚の現れでもある。宗教的感覚と強く結びついた概念であるために、「世界劇場（Theatrum mundi）」の表象には、言葉や理性を超えた知覚（視覚）によって、一瞬で真理に触れられるような啓示・徳育的な効果が期待された。そのために、16世紀以降「劇場」の言葉は、単に舞台上での連続的な表現活動だけを意味するのではなく、世界地図、そして世界の知識を集積した書物などの教育的な媒体を指すためにも用いられるようになった[20]。

しかし、書籍は、言葉という理性によって司られる手段で編まれたテクストによって構成されている。文章を読むという行為は時間を要し、図像と違って一瞥で大体の内容を把握することは困難である。そこで書籍は、扉絵に本の世界観や内容を集約させるような図像を備えることで、「世界劇場」の表象としての期待に応えるようになった[21]。ここに至り、この時代の扉絵は、挿絵とはまた異なる一つの特殊な芸術表現へと昇華するようになったのである。扉絵は、テクストで表現された出来事を、まるで「見ているかのように」忠実に描く目的で作成されたのではない。書籍が伝えるべく企図された命題を、「一瞬で悟らせる（見せる）」ために描かれることとなった。つまり、上記のような「世界の鑑としての劇場」という概念が普及した時代において、「見る」という行為が、ことに書籍に扉絵に関しては、現在とはやや異なる理解をされていたことを意識しておかなくてはならない。

3.「見ることは信じること」？――『日本殉教史』の情報の典拠と情報の信憑性

『日本殉教史』の作者トリゴーは、東アジアに派遣された宣教師であったにもかかわらず、実は日本に一度も足を踏み入れたことがない。したがって、『日本殉教史』に書かれたことは、トリゴーが自分の目で見て書いた内容ではないのである。ここで簡単に、トリゴーの略歴を簡単におさえておこう。

トリゴーは、ドゥエー（Douai）と呼ばれる町出身である。ここは、現在フランス領だが、トリゴー誕生の時点ではスペイン領フランドルに属していた。トリゴー誕生の15年前には、トレント公会議における対抗宗教改革の興隆の機運を受けて、フェリペ二世がイエズス会の支援を受けて神学部を中心とする大学を建設している[22]。この地にはイギリスからカトリック教会関係者らが亡命し、政治宗教的プロパガンダが醸成される環境をつくっていたばかりでなく、多様な言語環境を形成し、相当量の出版物が刊行される一大学問拠点ともなっていた[23]。この地で研鑽を積んだトリゴーは、1594年11月22日イエズス会に入会し、ガン（Gand）でレトリックの教師を勤めた後に、科学と東洋の言語の修学が認められ、ヨーロッパ外での宣教の道へ進むことが許された。1607年リスボンを出発し、1610年に中国に到着後は中国宣教に従事した[24]。

この時期、日本ではまだキリスト教宣教が継続されてはいたが、トリゴーは中国滞在中には日本に赴かず、1613～1618年にかけて、ヨーロッパに一時帰国していた。この滞在は、中国宣教でマテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552-1610）の後継者となったニッコロ・ロンゴバルド（Nicolò Longobardo, 1559-1654）の要請を受けたもので、当時日本管区から独立していなかった中国管区の独立と、いわゆる適応主義による宣教方法をローマ教皇庁から認められるよう交渉する使命が与えられていた[25]。1615年にこれらの目的を達成すると、トリゴーは1617年までイタリア、フランス、ドイツ、フランドル地方の諸都市を訪れ、各地のカトリック君主に資金援助を要請した[26]。この旅行の目的は、環境の厳しい極東の宣教地に派遣できる若く健康で有望な人材の確保と、東アジアでのイエズス会の宣教成功を各地に伝えることでもあった。トリゴーにより書かれたアジア宣教の成果を伝える一連の著作は、そうした宣伝活動の一環でもあった。著名な『基督教遠征中国記（*De Christiana Expeditione apud Sinas suscepta ab Societate Iesu*）』も含め、多くがこの時期に執筆・刊行されている[27]。『日本殉教史』も例にもれず、テクストの第一～四部は、この時期に邂逅した選帝侯ヴィルヘルム五世とその後継者マクシミリアン一世の期待に応えるために執筆され始めたと考えられる（本は出版時にかれらに献呈されている）。

ヨーロッパ滞在中であるにも関わらず、トリゴーが『日本殉教史』の大半（第一～四部）をヨーロッパで書き上げることが出来たのは、日本から送付された年報（*Literae Annuae*）と呼ばれる、一年単位で執筆された複数の宣教師の現地からの総括レポートを読むことが出来ていたからである。トリゴーが『日本殉教史』執筆の直前に刊行した日本関連書籍に、『日本のキリスト教の出来事（*Rei christianae apud Iaponios*）[28]』（1615）があるが、これは日本へ派遣されたポルトガル人イエズス会士ホアン・ロドゥリーゲス・ジラン神父（João Rodrigues Giram, 1556-1629）の1609～1612年の年報をもとにしている。後に執筆された『日本殉教史』の第五部も、トリゴーがヨーロッパから中国へ戻る途上で、ゴアに届けられた日本からの年報に基づいて、ゴアで執筆されている。

さらに、トリゴーの第三、四部の記述は、同時期に出版されたスペイン人イエズス会宣教師ペドロ・モレホン（Pedro Moréjon, 1562-1639）とルイス・ピニェイロ（Luis Pinheiro もしくは Piñeyro, Piñeiro, 1560-1620）による殉教伝に、内容的に多くの情報を依拠している。モレホンは、有名な天正少年使節団の日本帰国につきそって来日し、マニラへ追放されたキリシタン大名、高山右近（1552-1615）に伴って日本を発った宣教師である[29]。モレホンは、マニラで病死した高山右近を看取り、メキシコのアカプルコを経由してスペインへ渡っている。アカプルコでは、すでに『日本の教会が経験した迫害の記録：1614年と1615年に我等の聖なる教えを守り栄光のもとに命を失った素晴らしき殉教者たち[30]』（1616）を刊行し、その翌年マドリッドでもほぼ同じ題名・内容を擁する本を刊行した[31]。さらにモレホンの『殉教伝』は、イエズス会ポルトガル管区の在マドリッド管区長代理ルイス・ピニェイロにより再構築された[32]。この作品の編纂には、モレホン自身も協力し、『1612年から1615年にかけて日本王国でわれらの聖なる信仰におこった出来事』として、1617年に出版されている[33]。

つまり、トリゴーの『日本殉教史』は、年報や既存の殉教伝など二次、三次的な情報に依拠し物語として再構築された作品である。ただこれは、同時代にヨーロッパで普及した海外宣教関連の書籍としては一般的な傾向である。例えば、前述の『基督教遠征中国記』は、マテオ・リッチが1608～1611年に執筆した報告書のかなり自由なラテン語翻訳で、翻訳というよりリッチの情報を換骨奪胎した作品である[34]。しかも、この書はラテン語で刊行された後に、独・伊・西・仏語に翻訳されよく読まれ、中国情報を当時のヨーロッパに広く普及させた。現在でこそジャーナリズムにおける現場主義は、情報の信頼性を担保する要素として重要視されるが、当時はどのように受け止められたのだろうか。

トリゴー自身、この問題は強く意識していたらしく、ラテン語版の序文では自ら以下のように述べている。

> 実際、日本には、一度も行ったことはないし、またこの使命から解かれたけれども（つまり日本の宣教の仕事にはつかなかったが）、（ここに書かれていることを）信じて欲しいと敢えてお願いしました。まずは読んで、その内容を楽しんでほしいのです。神の手によっていまだ語られていない物事を見て、あなたの心は驚嘆し、広がるでしょう。大体の時間は、古代の人々がわれらに伝えた驚嘆すべき物事と、似たようなことを読むことになるでしょう[35]。（下線部筆者）

驚くことに、ここでトリゴーは、『日本殉教史』に書かれた事柄の全てが伝聞であると打ち明けた上で、それでも内容を信じて欲しいと読者に請うている。

一方で、トリゴーではなく翻訳者ピエール・モランにより執筆されたフランス語版の序文においては、「筆者のトリゴーが日本に一度も行ったことはない」事実は明言されず、以下のように表現される。

> 親愛なる読者よ、『日本殉教史』と題する本書を読もうとして、おそらくはこの扉絵に目をとめたことでしょう。日本とはなにかもご存知なく、一度も日本について話されているのを聞いた事もないでしょうから。もしそうでしたら、お願いですのでこの前書きを辛抱強く読んでみてください。真実に対して、不都合な判断をくだしてみたり、ここで読まれる物語は、思うがままにつくられたものだと考える前に。あなたが未だ曾て見たこともないものは沢山あります。そして、それでもあなたが疑いなく信じているものも沢山あるのです。私の、人間への信頼、また神への信仰は、見たものによるのではなく、信頼に価する証言によっているのです[36]。（下線部筆者）

フランス語版では、読者が見た事もない出来事について物語るにあたり、まずは読者の信頼を得たいと主張しているのである。また、「見たこともないものを信じる」という行為を神への信仰になぞらえる巧妙なレトリックで、直感的な知覚の崇高さ、宗教性すら強調する。そして、見たこともない内容を信じるための端緒として、扉絵に言及している。また、図像の役割についても、同じく序文において以下のように説明される。

> あなたが、この国（日本）の暴君が行う固有の拷問を、ここで読まれてもそれを理解するのはとても難しいので、印刷屋に各本の冒頭に図版を刷らせました。その図版に頼ったら、その拷問がどんなものかが完璧におわかりになることでしょう。読みながら、（文章にあるのと）同じ拷問の図を目にする時にはなおさらです[37]。

ここでは、挿絵とテクストの内容的な整合性が強調され、各章の冒頭に設けられた扉絵の働きにより、その部分の内容がより簡単に理解できることを保証している。フランス語版では、書籍に挿入される扉絵の力が、まさに一つのテクストとしてより強く意識されていたために、ラテン語版とは異なる挿絵の構成が試みられたと言えるだろう。

4. テクストを裏切る絵――日本図像の背景にある宗教改革期の殉教図

フランス語版『日本殉教史』では、序文で保証された「見る」ことによる信憑性を保つために、ラテン語版に見られた画像が意識的に削除されている。というのもラテン語版『日本殉教史』では、文章内の説明が無視されて、内容からは若干飛躍した挿絵が描かれていることがあるのだ。例えば、小浜の住人であったジェルマン・ゴロスケ（Germain Gorosuque）なる人物に与えられた拷問の挿絵がそうである。本文によれば、ゴロスケの受けた仕打ちは以下のようなものだった。

> 役人の前に最初に裁かれたのが、小浜の町の住人で、41 歳になるゲルマン・ゴロスケだった。ゴロスケは、どのような評定が彼に裁定されたのかは知らないまま、どうせ頭をはねられることになるだろうと考えた。そこですぐに、死刑執行人の前に跪いて、その首をさしだした。しかし、ゴロスケの予想は間違っていた。というのも、彼は、地面に十字架のように交差して組まれた二本の木に寝かせられて、そこにしっかりと結びつけられたからである[38]。（下線部筆者）

この記述に拠れば、ゴロスケは、地べたにおかれた十字架の上に、まるで磔刑のように結びつけられたということになる。ところが、この記述に相当する挿絵は、［図 1］のようになっている。テクストでは十字であったはずの刑具が、挿絵では四角い枠のような拷問具に変化させられている。

図 1

実は、この拷問具は「ラック（Rack）」すなわち棚（枠）とも言われ、16 世紀のヨーロッパでは、ロンドン塔での尋問やスペインの異端審問においても頻繁に用いられていた[39]。それゆえこの拷問は、トリゴーの本の刊行以前にも宗教改革期の殉教伝では頻繁に図像化されていた。その嚆矢は、ジョン・フォックス（John Foxe, 1516/1517-1587）の『行動と記念碑（*Acts and Monuments*, もしくは単にフォックスの殉教の書 , *Foxe's Book of Martyrs*）』（初版 1563）に見られる（その後の再版 1570、1576、1583 年の版でも反復される）［図 2］[40]。『フォックスの殉教の書』は、プロテスタントがカトリックのメアリー一世の元で受けた迫害を告発したものである。プロテスタントは、基本的には聖像の造像には批判的な立場をとっていたが、『殉教の書』には腕の良い職人に造らせた多彩な殉教図が掲載されている。これは、カトリックにおける「偽の殉教者」に対して効果的に反駁する意図が込められていた[41]。［図 2］に表現される拷問は、カスバート・シムソン（Cuthbert Simson, ?-1558）という名のプロテスタントが、異端であるとの糾弾を受けてロンドン塔で受けた仕打ちに基づく。

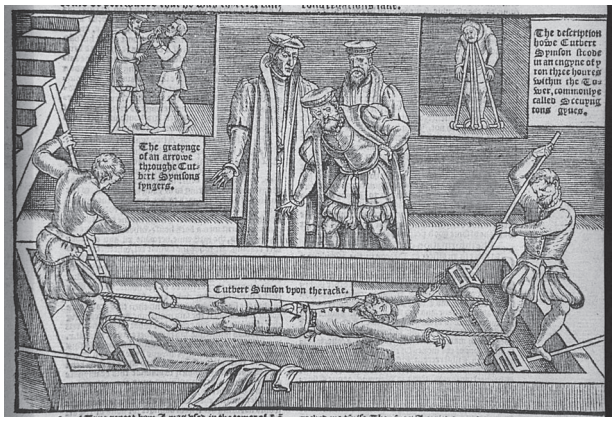

図 2

しかし、同じラックの拷問を受けた上で、イエズス会士エドマンド・キャンピオン（Edmund Campion, 1540-1581）がエリザベス一世に処刑されると、フォックスの殉教伝に呼応するかのように、同じ拷問の挿絵を収めたカトリックの殉教伝が直ちに出版された。その殉教伝の本文は、キャンピオンと同じイエズス会士のロバート・パーソンズ（Robert Parsons, 1546-1610）により著され、イングランドの領土内ではなく、ボローニャ出版と偽装されて、その実イングランドからの移民が多かったルーアンにおいて『イングランドの迫害についての書簡（*De persecutione Anglicana epistola*）』（1581）と題して印刷された[42]。本書は、『イングランドの迫害についての小冊子（*De persecutione Anglicana libellus*）』（1582）と名前を変えて、パリそしてローマでは少なくとも二刷の増刷が成されたほか[43]、『イングランド迫害についての釈義（*De*

persecutione Anglicana commentariolus)』の題でインゴルシュタットで出版された[44]。これらは題名や出版地・出版社は異なるものの、本文に関してはほぼ全て同じ内容の書籍となっている[45]。

図 3

一方で、この事件を図像化したのが、リシャール・ヴェルステガン（Richard Verstegan, a.k.a. Richards Rowlands, 1550-1640）である。キャンピオンの最初の殉教伝がルーアンで 1581 年に出版されたのを受けて印刷されたのが、『現在のイギリスの教会図譜（*Praesentis ecclesiae anglicanae typus*）』（1582）である[46]。これは、現存しない六葉の木版図像が一体化された一枚の紙で、前述のパーソンズの『イングランドの迫害についての小冊子』が、ローマのジョルジオ・フェラーリ（Giorgio Ferrari）の元で出版された際に、ヴェルステガンの図像がパーソンズの本の挿絵として挿入された。［図 3］ヴェルステガンは、イギリスで同種の印刷物を作成した廉で追及されたためにフランスへ亡命し、1583 年末にパリで秘密裏に『信仰のためにイギリスでカトリックが耐えた様々な残虐についての短い記録[47]』を再印刷した挙げ句、フランスでも二週間投獄されてしまった[48]。本書には、［図 3］をふまえた挿絵［図 4］が印刷され、そこには以下のような説明書きがなされた。

> とある木造の装置は、その上に神父たちの四肢が横たえられ拘束されるもので、この様に伸ばして痛めつけさせる。しばしば痛みの激しさに死んでしまう。われらの先祖は、世界で最も邪悪な人間に対してであったとしても、いまだかつてこのように残虐な拷問を、行ったことはなかった。今日では、良き純粋なカトリック信者に対して、われらが敵（のプロテスタント）がやっていることだ[49]。

図 4

ここでは、本来カトリック君主治下の刑罰としても行われていたラックの拷問は、プロテスタントの未曾有の残虐さを示す「史上初の」拷問としてたてまつりあげられる事となった。

本書は、1584 年の春ヴェルステガンがローマへ赴いた折りに、ラテン語でも再出版され、その銅版画はジョバンニ・バッティスタ・カバリエーリ（Giovanni Battista di Cavallieri）によってコピーされた[50]。このカバリエーリは、著名な版画の連作『イギリス教会の勲章（*Ecclesiae anglicanae Trophaea*）』（1584）によって知られる。この版画の連作自体は、ニッコロ・チルキニャーニ（Niccolò Circignani, 若しくはポメランチオ Pomerancio, 1530/1535-ca. 1590）の手がけた聖トマス教会（S. Tommaso di Canterbury）の壁画を記録したものである[52]。残念ながら、この教会は現在はもう遺されていないため、カバリエーリの版画がチルキニャーニの壁画のよすがを伝える唯一の画像資料となる。この版画の連作の第 31 葉は、キャンピオンの受けたラックの拷問の画像にあてられており、この図様は、パーソンズ作の殉教伝、そしてそれに依拠したヴェルステガンの殉教伝に通じるものである［図 5］。カバリエーリの版画の連作の一部であるということは、このラックによる拷問図像は、聖トマス教会の壁画の一部であったということである。この教会は、ローマのイエズス会が運営するイギリス学院に併設の教会で、イギリス出身のイエズス会士候補生が修学する場所でもあり、公共性も高い場所であった。

実は、この学院の設立に尽力したイングランド出身の枢機卿で亡命者のウィリアム・アレン（William Allen, 1532–1594）も、前述のキャンピオンの殉教を讃える著作を執筆していた。これは、『12 人の尊敬すべき神父たちの栄光ある殉教略史（A Briefe Historie of the Glorious Martyrdom of Twelve Reverend Priests）』と題され 1583 年に出版されており、同年にマチェラータ（Macerata）で出版されたアレンの殉教伝のイタリア語版（Historia del glorioso martirio di sedici sacerdoti）には、前述のパーソンズの殉教伝にみられた版画と類似する図像が掲載され

た。聖トマス教会の壁画の成立年が明確には分からないため、これらの一連の版画と壁画のどちらが先行していたのかは不明である[52]。

図5

ただ、こうした一連の図像の存在を通じ、皮肉にもプロテスタントの殉教伝に掲載された拷問図と類似する図像が、ヨーロッパ各地で出版されたカトリックのキャンピオンの殉教伝に次々に転載されることで流布していた事が分かる。しかもその図像は、ローマでカトリックの殉教者を顕彰する記念碑的な壁画の連作の一部へと昇華した。そして、その壁画も版画化されて普及された。それほど、この拷問図は汎ヨーロッパ的に普及した図像であったといえるだろう。

本図像の流布に関わった前述のヴェルステガンは、ローマ滞在後フランドルへ亡命し、スペイン君主からの年金の授与という生活上の保証を得た。そこでヴェルステガンは、アントワープを拠点に、イギリスのカトリックのプロパガンダを担う出版事業に携わり、数々の書籍を世に出した[53]。アントワープは、トリゴーの『日本殉教史』のラテン語版の挿絵を担当したラファエル・サドラー父子も拠点としていた地であり、当然の事ながら、殉教伝を図像化するにあたり、既出の著名な殉教図を参考にした可能性が高い。

実は、『日本殉教史』内には、挿絵で図像化されていない殉教者も大勢登場する。テクストで語られる全ての殉教者が図像化の対象となっていない以上、図像化の選択もまたある種の意味を持つはずである。なぜ「地面で木にしばりつけられる拷問」を受けたジェルマン・ゴロスケが、特に図像化の対象に選ばれたのか。ラテン語版序文では、「神の手によっていまだ語られていない物事を見て、あなたの心は驚嘆し、広がるでしょう。（下線部筆者）」と断られてはいるが、実際に図像化されたのは、ヨーロッパで普及した図像に通じる既視感のある拷問であった。

逆に、未だ曾てヨーロッパでは試されたことのない日本特有の拷問については、ラテン語版・フランス語版ともに絵画化の対象となっていない。例えば、「俵責め」と呼ばれる拷問がある。これは、実際に日本に存在した拷問方法で、きつく縛りつけた人間を一人ずつ米俵で巻き、そのまま河原、馬場、砂浜などの戸外に重ねて放置して、棄教を促した。その模様は『吉利支丹物語　下』にある挿絵の通りである［図6］[54]。この拷問方法については、日本に遺される数々のキリシタン文学（『南蛮寺興廃記』、『吉利支丹物語』）にも記録されているほか、ごろごろと人間を転がす形態から、この拷問が棄教を示す「転ぶ」という言葉の語源になったともされている[55]。つまり、日本においてはそれだけ普及しており、キリシタンに対しての典型的な拷問とみなされていた事が分かる。確かにこの拷問については、トリゴーもその著作の中で度々言及しており、その説明は以下の通りである。米俵が存在しないヨーロッパの読者にむけて、米俵の説明に苦労しているのがうかがわれる箇所である。

> 女子供を連れてきて、それぞれを藁の袋（これは日本人がかれらの米や穀物を入れておく袋）に入れて、頭を袋の外に出しておく以外は、四肢が自由に動かせなくなるほどしっかり縛る[56]。

図6

この方法で単に苦しめられただけでなく、死に至り殉教したケースもトリゴーの『日本殉教史』では語られる。京都で1614年に死亡したベノワ（ラテン語版 Benedictus/ フランス語版 Benoît）呼ばれるキリシタン[57]、安房（Aua）の「王子」であったジャン（ラテン語版 Ioanne/ フランス語版 Iean）とその妻マグダレーナ（ラテン語版 Magdalena/ フランス語版 Magdalene）の死がそうである[58]。

フランス語版序文では「この国（日本）の暴君が行う固有の拷問を、ここで読まれてもそれを理解するのはと

ても難しいので、印刷屋に各本の冒頭に図版を刷らせました。その図版に頼ったら、その拷問がどんなものかが完璧におわかりになることでしょう。」と述べられていたにもかかわらず、「俵責め」のような日本固有の拷問はトリゴーの作品内で実は一例も図像化されないのである。図像化されたのは、いずれもヨーロッパにおいてすでに類似の刑が試行されているか、もしくは図像化されたケースばかりである。

ラテン語版序文では、「古代の人々がわれらに伝えた驚嘆すべき物事と、似たようなことを読むことになるでしょう」と述べられていたが、実際に特に好まれて図像化されているのが、古代の殉教者に通じる拷問の図である。

一例を挙げると、アダム・荒川（ラテン語版 Adam Aracaua/ フランス語版 Adam Aracava）が受けた拷問がそうで、それは以下の通りであった。

> アダムは、どんな場所よりも人通りの激しい辻に引きたてられた。そして、そこで十字架のようなものにかけられた。その上では、恥辱や痛みがそれほどではないために、その処刑ではどうしても死に至らしめられることはなかった。地面から八〜九の高さで、五の間隔の二本の柱を立て、それぞれの頂点をつなぐ一本の棒をわたして、その棒と両方の柱に処刑される人がくくりつけられた。アダムは座ることもできないままで、これに少し寄りかからされた。上の方には縄が張られていたため、そこに頭をのせて少しの休息はとることができた。こうしてアダムは、この装置の二本の柱には触れないままで縄にくくられ、地面にはつま先がふれない状態に留めおかれた。この状態で、アダムはまるまる九日を過ごし、聖土曜日になった[59]。

テクストに拠れば、現代の運動具の鉄棒のような形状のコの字型の枠にアダムが縛られ、地面に足も触れず身体を宙に浮かせた状態でぶら下げられていたということになる。柱の高さを伝える長さの単位は本文に明記されないため、詳しい大きさは分からないが、足がつかない程度ということで、大きくとも高さ２メートル弱、幅は1.5メートル前後だったのではないだろうか。この拷問の図像［図７･８（８では拷問集約図の部分）］は、柱の間にわたしてある縄が棒となっている以外は、おおむねテクストに呼応しているものが描かれているが、他の悲惨な拷問や殉教者をさしおいて、なぜ特にこの人物の受けた拷問が図像化されたのだろうか。

図７

図８

実はこの拷問図に似通う図像が、ローマのステファノ・ロトンド教会の壁画に見られる［図９］。これは、ローマ帝国のゴティクス二世（Gothicus II., r. 268-270）の元で様々な拷問にかけられて殉教したペルシャ人の一家聖マリウス（Marius）、その妻の聖マルタ（Marthe）、その息子達アウディファクス（Audifax）とアバクム（Abacum）が受けた拷問と殉教が描いた図である[60]。古代ローマの殉教を主題とする三〇点あった図像の一点で、上記聖トマス教会の殉教連作壁画の作者でもあったチルキニャーニに描かれている（この壁画は幸運なことに現存している）[61]。聖マリウスらは、伝統的に殉教録に名を連ねてきた聖人たちであるが、具体的にどのような拷問を受けたのかについては、詳細が知られていない[62]。そのため、ロトンド教会の壁画において聖マリウスを描くにあたり、どのような史実に基づき、この図像が描かれたのかは定かではない。しかし、当時トレント公会議でも影響力を奮った有力者ガブリエル・パレオッティ枢機卿（Gabriele Paleotti, 1522-1597）にも、ロトンド教会の壁画が“徳育

的”であることが公認されていた[63]。

図 9

1580 年代から 16 世紀末にかけてのローマは、ロトンド教会の壁画に限らず、様々な殉教図が教会や学校の内部に描かれ、新たな殉教図創造の中心地となっていた。中でもイエズス会は、上記聖トマス教会の殉教連作壁画以外にも、ローマ・イエズス会学校の一部ドイツ・ハンガリー学校（Collegium Germanicum et Hungaricum）の壁画、さらにイエズス会修練院（クリナーレ宮殿）内部、そして修練院のためのサン・ヴィターレ教会も殉教者図像で装飾したとされる[64]。また、1590 年に、古代のキリスト教徒の墓所（カタコンブ）がローマで新たに確認されたことから、文字通り原始教会の殉教者の礎の上にある正統な教会としての矜持を、カトリック教会が再確認することになった。新たに発掘された殉教者の遺体が、聖遺物としてヨーロッパ各地に分配されることにより、ローマ発の殉教者崇敬は地平的な広がりを伴い発展した[65]。それだけでなく、ロトンド教会、聖トマス教会、ドイツ・ハンガリー学校の三箇所の壁画は、全てが上述の版画家カバリエーリにより出版されたために、印刷物を通じヨーロッパ中にその図像を普及させることができた[66]。これらの図像は、その後のイエズス会およびカトリックの殉教図像造像の方針に、大きな影響力をもつことになった[67]。

トリゴーの『日本殉教史』から、特にアダム・荒川のテクストが図像化されたのは、作者のトリゴー自身がローマ滞在中に、一連の殉教壁画をを目にしていて、そこからインスピレーションを受けていた可能性がある。上述したように、トリゴーは本書のラテン語版の挿絵に関しては、サドラー父子と連絡を取り自ら指示を出していた。もう一つの可能性は、その箇所を読んだ挿絵画家サドラー父子にとって、その拷問が著名なロトンド教会の壁画（すなわちカバリエーリの版画）を想起させるものであったからではないかと考えられる[図 10]。版画には、背景に山がそびえ、人が刀で斬首されんばかりとなっている様子などが描かれ、その細部は『日本殉教史』のアダム・荒川の拷問図［図 7］と奇妙に一致する。

図 10

アダム･荒川の拷問図に限らず、実は『日本殉教史』の挿絵は、カバリエーリの三点の版画集の細かい箇所から、ほかにも様々なモチーフを採っている。例えば、第 3 部における樹木からのつるし上げの刑（ラテン語 p. 204、仏語 p. 227）は、『武装した教会の勝利（*Ecclesiae militantis triumphi*）』の第 25 葉に見られるほか、第 4 部の手足をしばられ重しをつけられてつるし上げられる拷問（ラテン語 p. 323、仏語 p. 368）は、『イギリス教会の勲章』の第 34 葉に見られる[68]。斬首の図像は、カバリエーリの版画と『日本殉教史』の挿絵においては、背景での細かい描き込みを入れると、全編で頻繁に出てくるために、改めて比較する必要がないほどである。

また、『日本殉教史』の挿絵に登場する拷問器具は、アントニオ・ガローニオ（Antonio Gallonio, 1556-1605）により『殉教の緒装置と様々な殉教方法についての概論（*Trattato degli instrumenti di martirio e delle varie maniere di martirizar*）』（1591）で紹介された装置に通じるものがある[69]。本書は、古代の殉教者が受けてきた拷問や殉教の模様を、その器具に焦点をあてて図解した本で、イタリア語が出版された後に、ラテン語、そしてフランス語も出版され、ベストセラーとなったとされる[70]。

このように、トリゴーの『日本殉教史』の挿絵は、すでにヨーロッパで流布し、浸透していた先行の殉教図像との関連性が強く認められる。ラテン語版の序文で、トリゴー自身が「大体の時間は、古代の人々がわれらに伝えた驚嘆すべき物事と、似たようなことを読むことになるでしょう」と述べた通り、古代の殉教者に通じるような拷問が、特に好んで選ばれて図像化されている。挿絵はテクストの説明の補完として挿入されているわけではなく、ヨーロッパの読者に、「見たことがなかった」とし

ても「信じて」もらえるために、ヨーロッパの当時の文脈において受け入れやすい主題が意図的に選択され、説得力を持たせるために、既存の殉教図像が意識されながら描かれたのだ。

5. 出来すぎた殉教
――日本での磔刑へのそれぞれの反応

既視感をたたえた殉教図を、「見たこともない日本」の殉教図として提示することで、トリゴーの『日本殉教史』はヨーロッパの読者にその内容を真理として知覚させることができたのだろうか。フランス語版では、トリゴーが日本を実際に見たことはないという事実が巧妙なレトリックで伏せられ、テクストを逸脱したジェルマン・ゴロスケの挿絵が省かれるなど、ラテン語版に比べて注意が払われている。その背景には、フランスでのイエズス会の不安定な立場があるだろう。

実際、イエズス会はすでに 1594-1603 年にかけてフランスから追放されており、その後宮廷内に告解師として入ったイエズス会士は、そこでの確執に翻弄された。『日本殉教史』のフランス語版が出版された 1624 年は、図らずもイエズス会士カルロ・スクリバーニ（Carlo Scribani, 1561-1629）が『キリスト者の政治（*Politicus christianus*）』（1624）をアントワープを出版したのだが、イエズス会による婉曲的なフランス王政への批判として捉えられ、フランス国内で問題視された[71]。こうしたイエズス会の筆禍事件は、その後もフランスで起こっている[72]。しかし、フランスにおけるイエズス会への不信感を最もよく表現していると思われるのが、プロテスタントの文人アグリッパ・ドービニエ（Agrippa d'Aubigné, 1552-1630）により書かれた『サンシー殿のカトリック告白（*Confession catholique du Sieur de Sancy*）』（1598）における（間接的な）イエズス会批判である。この作品は、プロテスタントからカトリックに改宗した実在人物ニコラ・ド・アルレーもしくはサンシー殿（Nicolas de Harlay, sieur de Sancy, 1546-1629）に仮託された告白文書である。内容は、カトリックの立場を擁護してるように見えて、その実カトリックの信仰を笑いものにする痛烈な皮肉となっている[73]。そこでは、日本における殉教を伝えるイエズス会士について、以下のように語られる。

> …（前略）…日本では、イエズス会士たちが言うことには、イエズス会士が磔刑にされ、大いなる奇蹟を起こしたということだ。こうしたことは、日本以外では起こり得ない。なぜなら他の国々では信心などないからだ。<u>それが本当かどうか見に行かせるよう</u>、フランスのあらゆるユグノーどもを、処罰せねばなるまい[74]。（下線部筆者）

ここでは、「日本には他の場所では見られない信心があるために、日本でしか起きない殉教や奇跡がある」という、トリゴーの『日本殉教史』序文でも展開されたような論が、大仰に再現される。そして、それを信じられないプロテスタントらを「それが本当かどうか見に行かせる」べきだと主張する。これは、逆説的に「本当かどうか見に行って確かめられないような」日本の出来事を喧伝するイエズス会士を批判し、皮肉っているのである。

このドービニエの批判の矛先が、日本の殉教事象一般についてされているのではなく、「磔刑」であることに注目したい。実は、この批判が書かれた前年、1597 年の長崎で、日本人・外国人を含む 26 人の宣教師及びキリスト教徒が磔の刑に処され亡くなっている。彼らこそ、現在「日本二十六聖人」の名でも知られる著名な殉教者である。処刑された当時、イエス・キリストと同じく十字架において処されたというインパクトのために、そのニュースは直ちにヨーロッパへ報告された[75]。十字架における刑は、日本では磔と呼ばれ、戦国時代から江戸時代にかけては効果的な見せしめとして頻繁に施行され、この 26 人への刑もキリスト教における意味が深く理解されないまま執行された[76]。しかし、同時期のヨーロッパでは、罪人にキリストと同じ死を与える事で英雄視されては困るという観点から、特に異端者の処刑には磔刑が避けられて、聖遺物すら残さない焚刑が常套的な処刑方法であった[77]。そのため、日本で実際に磔が行われたという知らせは、キリスト教を奉じる世界中の人々に、大きな衝撃とともに受け止められ、ヨーロッパ諸言語に直ちに翻訳された[78]。上記のドービニエの文章は、磔刑があまりにも出来すぎた殉教であることから生まれる当時のヨーロッパの人々の猜疑心を良く表現したものと言えよう。

この時犠牲となった 26 人の内訳は、フランシスコ会の宣教師が 6 人、フランシスコ会関係者の信徒が 17 人、イエズス会士が 3 人であった。殉教者の大多数がフランシスコ会士であった事もあり、ヨーロッパではフランシスコ会が、この殉教者の聖性をいち早くローマ教皇庁に認めさせようと試みた。というのも、対抗宗教改革の一環として、多すぎる聖人の選定に慎重となっていた教皇庁は、1588 年以降聖人の基準を厳格化し、教皇庁の許可なき聖人への崇拝を固く取り締まるようになっていたからである。日本での宣教では、イエズス会に大きな遅れをとっていたフランシスコ会は、新たに出来た列福制度にのっとって、この 26 人の聖性を教皇庁に公認させることで、日本の公式の「最初の殉教者」をフランシスコ会から輩出するという名誉も狙っていた。そのため、フラン

シスコ会は、（イエズス会士三人を除く）二十三人の図像を盛んに作成した[79]。

一方で、日本での「生きた」宣教活動への見込みを捨てていなかったイエズス会は、日本での宣教の犠牲者を安易に「殉教者」という名の英雄にすることに躊躇していた[80]。そのために、イエズス会は教皇庁にこの殉教者たちの列福を申請する事にも当初積極的ではなかった。しかも、1600年前後のイエズス会にとっては、日本での殉教者よりも、会の創立者イグナチウス・ロヨラや、会の創立メンバーで東アジア宣教の立て役者であるフランシスコ・ザビエルらの聖性を認可させる事の方が重要であった。

列福運動にあたり、イエズス会とフランシスコ会の足並みがそろっていなかった事もあり、その動きは一時期停滞する。列福作業が再び動き始める契機となったのが、フランシスコ会が主導した支倉常長の率いる慶長使節団のローマ訪問（1615年）であった[81]。この使節団は、イエズス会が組織した天正少年使節団（1585年ローマ到着）に対抗したもので、フランシスコ会による日本への宣教活動の「成功」を、教皇庁とヨーロッパ各国に印象づける事にもなった。一方、日本での宣教活動では、フランシスコ会の一方先に進んでいたはずのイエズス会は、日本での1613年12月の「伴天連追放文」の発布および1614年に実施された宣教師およびキリシタンの国外追放の責任を問われる立場にあった。トリゴーが『日本殉教伝』執筆において依拠した上述のピニェイロの殉教伝は、その責を受けて、イエズス会を擁護するためにも執筆されている[82]。

トリゴーも、自分の『日本殉教史』が、日本におけるイエズス会の立場を擁護する作品である必要性をひしひしと感じてたはずである。そのために、トリゴーがとったのが、未公刊資料である年報と書簡に依拠した第五部の執筆であった。

6. イエズス会の磔刑図――トリゴー『日本殉教史』に第五部が追加されたわけ

本稿第一節で述べたように、『日本殉教史』は、二段階の異なる場所・異なる時期での執筆を経た部分で構成されている。第一～四部までは、トリゴーのヨーロッパ滞在中に執筆され、その原稿はトリゴーが中国へ旅立つにあたりヨーロッパに残したと本人が本文中で語っている[83]。これは、危険な航海で万が一原稿が失われるのを避けるためでもあったが、そもそも第四部末尾には本全体の結語も書かれ、また多くの挿絵が第四部の殉教を描いていることからも、本来なら四部までで完結すべき殉教伝であったはずである。整合性のとれた構成を犠牲にしてまで、なぜ第五部が『日本殉教史』に加えられたのか、その理由を探りたい。

『日本殉教史』の原稿を残し、1618年4月リスボンの港を出立したトリゴーは、中国へ向かう経由地であるインドのゴアに同年10月に到着した[84]。そして、当地で新たに日本からの最新の書簡や年報を受け取った。当時は日本からの書簡は、マカオとゴアを経由するか、マニラとスペイン統治下の中米を経由してヨーロッパに到達していた。要するにゴアでトリゴーが手にした書簡は、まだヨーロッパには届いていない新情報で、この情報を得たトリゴーは、ゴアから以下のような書簡をヨーロッパに送付している。

> …日本についても少しお知らせします。（中略）長崎ではキリスト教会はおよそ半年の間平穏を保っていましたが、時宜悪くたくさんの会の修道士がいたために迫害が大きくなりました。（中略）全部で、20人の人々がキリスト教信仰のために命を落としました。ほかのものは不屈の精神でひどい責め苦を受け、耐えました。どのようにこのような事が起こったのか、それについては、私は最近四部の本で扱いましたが、（その原稿は）ヨーロッパに置いてきました。そこには、日本の勝利（*Japonische Triumph*）と（題名を）書きましたが、ひょっとするとすでに出版されているかもしれません。（下記の事をする）前に、何も（印刷に）あげないでください。（10月に到着してから）2ヶ月の間に、我々はより多くの手紙を中国と日本から受け取りました。（マカオへの）出発の前に、出来れば、（これらの手紙を）ラテン語に訳し、私が残した最初の原稿に加えてください[85]。

つまり、トリゴーは、ゴアで得た情報を元に執筆した第五章を、ヨーロッパに残した原稿にぜひとも加えるようにと、自ら指示していたのである。その理由は、彼が目にした未公刊の書簡が、絶対に『日本殉教史』に加えられるべき有用な情報を含んでいたからにほかならない。それは、広島で1616年10月に行われたドミニクス・カッゾー（ラテン語Dominicus Catzo/フランス語Dominique Catzo）の磔刑による殉教であった[86]。テクストにおいて、ドミニクスの死は、十字架上で果てた聖アンドレに例えられるほか、カルヴァリオの丘（ゴルゴタの丘）という比喩により、イエス・キリストの死にすらなぞらえられることから、その殉教が際立って重要であったことが分かる。また、どのように十字架刑に縛られ、十字架が立てられたのか、という具体的なプロセスについても語られる。これは、すでに1597年の磔刑の信憑性が、物理的側面から疑われていたために、必要な説

明であった[87]。そして、長崎の二十六殉教者同様に、十字架に架けられた後に脇腹を槍でつかれたというシーンが、ラテン語版・フランス語版で同様に図像化される［図11・12］。『日本殉教史』の他の殉教図においては、複数の死が同じ図像に書き込まれたり、集約されている場合も多いが、この磔刑に限っては、ラテン語版・フランス語版双方で、単独で描かれている。フランス語版においては、この挿絵が扉絵をなっていることからも、これが第五部における最重要事項であったことがうかがわれる。トリゴーが、すでに完結していたはずの『日本殉教史』に、この第五部を何としても付け加えたかったのは、イエズス会のもとでも磔刑という奇跡的な死（真実の殉教）が起こった事を示し、イエズス会の日本宣教も、真実の殉教者を輩出するという「成功」を遂げていると伝えるためでもあった。これは、イエズス会士を除いた磔刑図像を盛んに作成し、しかも日本唯一の磔刑として宣伝していたフランシスコ会への最大の反論として機能したはずである。

図 11

図 12

第五部の磔刑の逸話の重要性は、単に第五部の挿絵（扉絵）から明らかなだけでなく、『日本殉教史』全体の扉絵に十字架のモチーフがあしらわれていることからも示唆される。ラテン語版の扉絵には、タイトルを囲み、イエズス会の創立者イグナチウス・ロヨラとアジア宣教の先駆者フランシスコ・ザビエルが描かれる。そしてタイトルの上部にはカルワリオ十字が刻まれた不思議な薪が描かれている［図13］。この薪は、本文テクスト内の第一部第三章「近々訪れるであろう苦しみを日本人キリスト教徒へ予言する二つの奇跡の十字架」において言及される。第一部の第一・二章は、実際の殉教伝に入る前の導入として、それぞれ日本の政治や教会の状況を説明するために用いられるため、この部分は事実上殉教伝の内容的な始まりにあたる。

図 13

この奇跡譚の内容は、1590年頃、小浜という有馬から三里は離れた場所において、薪の中から十字架の形が出現したという事件に始まる。さらに十字架の顕現は、1611年大村においてファビアンと呼ばれる日本人男性信徒が割った「日本イチジク（柿）」の木の中にも見いだされたという。同様の現象は、長崎においても翌年起こったとトリゴーは続けて語っている。その上で、十字架の出現が自然に生えている木の幹に出現したという各地の逸話が羅列される[88]。類似の「十字架にまつわる奇跡譚」は、『日本年報』に採録された1589年のルイス・フロイス書簡、およびフロイスの『日本史』、さらにバレト写本でも言及されていることで知られる[89]。

一方で、フランス語版の扉絵では、ラテン語版扉絵にあるのと同じ位置に十字架が描かれるが、こちらは三つの十字架が描かれている［図14］。その理由は、フランス語版の序文で以下のように説明される。

> 扉絵に関しては、この国（日本）に現れた三つの奇跡の十字架を表しています。二つは木の中に現れ、もう一つは素晴らしい光の中に表れました[90]。

図14

フランス語版の扉絵の上部左右に描かれた二つの十字架は、形状からして木の幹のようなものの上に表現されているため、第一部第三章で言及された小浜と大村の十字架の奇跡であると考えられるだろう。

「素晴らしい光の中に表れた」十字架については、第五部二一章に該当する記述が見られる[91]。この十字架は、ヨーロッパ人宣教師に代わり日本各地へのキリスト教の布教を担っていた同宿（ラテン語 Daju/ フランス語版 Dogici ou Doju）のジャン（ラテン語 Ioannes/ フランス語 Iean）と、ペトルス・スススケ（ラテン語 Petrus Susususque/ フランス語 Pierre Cacusuque）の殉教に伴って顕現した。彼らは五人の仲間達とともに駿河の国で監禁された後に、額に十字の焼き印を付けられ、指を切断され、足の腱を切断される拷問を受けた。ジャンは、拷問中も仲間達を励まし、スススケは刑吏に対して改心（改宗）を訴えすらしたが、拷問後に放置され、二人とも死亡した。その後、ディダクス・マンゴイチ（ラテン語 Didacus Mangoichi/ フランス語 Didaque Mangoichi）という名のキリスト教徒が、七色の虹色の光をたたえた十字架を目にしたが、それは亡くなった二人同様に生き残った五人も、いずれ信仰の証人・殉教者として戦うことになるだろう、という神の預言として解釈されている[92]。この逸話は、十字架の顕現という奇跡が、いずれ訪れる殉教を意味することを鮮明に告げているエピソードである。このような逸話に登場する十字架に脚光をあてたフランス語版扉絵は、最後に登場する挿絵が磔刑図となった『日本殉教史』に、図像上の一貫性を一層与えていると言えるだろう。この図像上の一貫性は、十字架の奇跡の顕現に始まり、磔刑を語る第五部で締めくくられる『日本殉教史』の本文テクストの内容にも、よく呼応しているのである。こうした一貫性を意識した時、トリゴーの『日本殉教史』は、イエズス会から提示された磔刑についての考えを入念に伝えている作品とも捉えられるのである。

結語にかえて

『日本殉教史』は、内容的には1620年までの事象しかカバーしていない。トリゴーが追加でゴアから送付したはずの原稿は、少なくとも1620年にはヨーロッパに到着していたはずである。というのも、1618年12月29日付けでゴアで書かれたトリゴーの書簡は、すでに1620年にはケルンで印刷されているからである[93]。しかし、『日本殉教史』が実際に出版されたのは、ラテン語版が1623年、フランス語版が1624年で、その原稿は数年ヨーロッパで寝かされていたと考えるのが妥当である。

もともと日本での殉教者を、教皇庁による聖性の公認（列聖・列福）の形で顕彰することに消極的であったイエズス会は、この時期にその方針を徐々に変更していったように見える。徳川政権に移行した日本では、1613年12月に「伴天連追放文」が発布され、それを受けて1614年に宣教師およびキリシタンの国外追放が命じられた。この後、日本国内でのキリスト教の迫害が増加・激化していくのは、『日本殉教史』の内容で触れられている通りである。それと並行して、トリゴーのローマでの働きにより1615年には中国管区が日本管区から独立し、中国が日本に代わって潜在的な可能性を秘めた新たな宣教のフロ

ンティアとして浮上してきた。そして何よりも、1622年にはイエズス会のかねてからの野望であった創立者イグナチウス・ロヨラと、フランシスコ・ザビエルの列聖が達成された。イエズス会のように、1540年に承認されたばかりの新興の修道会にとって、創立の中心メンバーが聖人となることは、キリスト教社会において他の伝統ある修道会に負けない地位を確立するためには、是非とも必要なことであった。少なくともそれは、日本における殉教者の早急な列福により、日本宣教の勝利を欧州内で宣言する以上に重要なことであると捉えられていたのではないだろうか。日本の殉教者の栄光が、創立者らの名声をかすませる事は避けねばならなかった。そのような意識が垣間見られるのが、1623年に出版されたトリゴーの『日本殉教史』のラテン語版扉絵である［図13］。ここでは、本の主題が日本の殉教者であるにも関わらず、本のタイトルの左右に、列聖されたばかりのロヨラとザビエルが、本の内容には直接的に関係しないにもかかわらず描かれている。しかも、聖性の表象たる光輪を頭頂にかかげ、列聖されたばかりであることを視覚的に明示して、日本での宣教（ひいては殉教の栄光）の下地をつくった先人たちの偉業を訴えかけている。1622年以前のイエズス会による日本殉教伝の出版が、フランシスコ会に比較すると少なく、殉教に関する刊行物の多くが年報や書簡の出版という体裁をとっていたのも、このような先人たちへの配慮による所が大きいだろう。

しかし、『日本殉教史』刊行（1623・1624年）以後は、イエズス会も様々な日本殉教伝の刊行するようになった。ラテン語版刊行の前年には、死の前からイエズス会士に英雄視されていたカルロ・スピノラが殉教し、すぐに彼の列福活動が始められた[94]。こうした文脈で、イエズス会にとって殉教伝の執筆と出版は、殉教者の聖性を宣伝し、列福活動を円滑にするための手段となっていくのである。

［付記］この研究は、日本学術振興会特別研究員（PD）研究奨励費の支援を受けて執筆された。また、本論文執筆にあたり、ご指導いただいた日本芸術大学名誉教授木村三郎先生、および資料調査に協力いただいたJesuitenbibliothek Zürich の Esther Schmid Heer 女史、Mark Greengrass 先生 , Harvard 大学 Houghton Library に心から感謝の意をお伝えしたい。

註

1　例えば、日本語によるキリシタンの殉教史の通史としては、片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』（時事通信社、1979年）がまず挙げられるが、ここでもトリゴーの著作は何度も引用されている。この研究には脚注がないが、例えば186、204-207、325頁などでトリゴーの書が言及される。

2　ラテン語には、微妙にタイトルの異なる版が存在する。この時代のヨーロッパで出版された書籍の常として、非常に長い題名が扉に付されており、その内容には献呈された人物名も含まれる。その献呈対象の記述部分に異同が見られる。本文では用いた版は以下のようになっている（紙面の都合のために、引用文に改行を反映出来ないが、/ を改行部分に挿入しておく）。“ad Serenissimos Principes / Gulielmum Parentem, Ferdinandum et Maximilianum / S. R. I. septemviros electores, Albertum / F. F. F. / Com. Pal. Rheni utriusq. Bavar. Duces.”（静謐この上なき殿下、神聖ローマ帝国七選帝侯、父ウィルヘルム、フェルディナンド、そしてマクシミリアン、アルブレヒト、プファルツ - ラインその他のバイエルンの諸侯閣下へ）。一方で、この献呈の部分が、“ad Serenissimos utriusq. Bavar. Duces / Gulielmum Parentem / Maximilianum, Ferdinandum, Albertum / F. F. F.”（静謐この上なきバイエルンその他の諸侯閣下、父ウィルヘルム、マクシミリアン、フェルディナンド、アルブレヒト諸侯へ）となっている版も存在する。「父ウィルヘルム」という表現があるが、当時のバイエルン公ウィルヘルム五世の息子は、マクシミリアン一世、及びアルブレヒト六世［Albrecht VI, 1584–1666］であるため、その誤謬を正すために後者が作られた可能性が高い。本文内容はほぼ同じで、頁番号には多少の異同があるが、本稿では基本的に前者の刊本を用いる。

3　『図書館情報学用語辞典』第五版による。

4　ジェラール・ジュネット、和泉涼一訳『スイユ――テクストから書物へ』（水声社、叢書記号学的実践、2001年）p. 12。

5　松田隆美「前言」（同編『貴重書の挿絵とパラテクスト』慶應義塾大学出版会、2012年）p.1。

6　例えば木村三郎『ニコラ・プッサンとイエズス会の図像』（中央美術公論社、2007年）など。

7　トリゴーの挿絵の構造は、それぞれが劇場の場面に相応しいように構成されているという分析がある。Susanne Lang, *Bilder zur Mission die jesuitische Literatur und ihre Illustration*, Petersberg; Michael Imhof Verlag, 2012, p. 207. 実際、トリゴーの作品は多くのイエズス会演劇の着想の源となった。Claudia Collani, „Helden, Heiden und Märtyrer: Ostasien im deutschen Jesuitentheater. Ein Überblick“, Christel Meier, Angelika Kemper（hrg.）, *Europäische Schauplätze des frühneuzeitlichen Theaters Normierungskräfte und regionale Diversität*, Münster: Rhema, 2011, p. 369-416. また、ドイツ語圏におけるイエズス会による日本演劇の広がりについては、大場はるか「近世ドイツ語圏南部の『宗派化』と日本のキリシタン：演劇に見られる宗派的規範の継承と『他者』の表現」（『歴史学研究』941号、2016年）p. 33-42。

8　ラテン語版 p. 380、フランス語版 p. 467。

9　フランス語版 p. 469。

10　ラテン語版では p.381-495、フランス語版 p. 469-612。

11　ラテン語版 p. 507-511、フランス語版 p. 628-631。Valerio de Ledesma（1556-1639）に関しては、以下にその伝記が簡略に述べられている。Pablo Pastells, *Labor evangelica ministerios apostolicos de los obreros de la Compañía de Iesvs*, t. 3, Barcelona, Imprenta y litografía de Hanrich y *Compañía*, 1904, p. 360-362, note 1. 実際、この人物は、日本における殉教の事跡を立場上多く知らされ読んでいたために、日本のキリスト教の状況について常に危惧し、心を寄せた人物として知られている。

12　コウロス神父は、1590年から日本宣教に従事し、天草、広島、有馬、長崎などで宣教活動とりわけ教育事業に従事した。マカオで巡察使であったフランシスコ・ヴィエイラにより、1617年7月以降日本の管区長に任命され、1621年10月に病

によりその職を辞するが、キリシタンへの迫害が激化する中、逃亡生活を続けながら北九州の各地を転々としながら宣教活動を続けた。同僚が次々と捕縛されていったために、1625年に副管区長、1630年に放浪生活の身の上ではあったものの、再び管区長となる。その後、迫害下で京都方面に出頭するために向かい病死した。Charles E. O'Neill, Joaquín M. Domínguez, *Diccionario Histórico de la Compañía de Jesús*, t. II, Roma; Madrid, Institutum Historicum S. I.; Universidad Pontificia, 2001, p. 987-988. 後に、コウロス神父も、フランシスコ・カルディムの殉教伝の登場人物として登場している。

13　コボ神父は、ヨーロッパの人文学にも通じた中国学者として著名であった人物で主に、マニラで活躍した。ルイス・デ・グラナダ著の"*Introducción al símbolo de la Fe*"（日本でのキリシタン版翻訳は、『ヒイデスの導師』で知られる）の漢訳『辯正教真伝実録』の執筆者としても知られる。Alberto Santamaria, Antonio Dominguez, Fidel Villarroel（eds）, *Apologia de la verdadera religion*, Manila, University of Santo Tomas Press, 1986. 日本では、豊臣秀吉によるフィリピンへの朝貢要求に対して、フィリピン総督からの使者として日本に派遣された事で知られるが、日本からの帰途に遭難死した。José Luis　Alvarez-Taladriz, « Notas adicionales sobre la embajada a Hideyoshi del Padre Fray Juan Cobo, O.P. », *Sapientia. The Eichi University Review* 3, 1969, p. 95–114.

14　その理由は、拙稿「イエズス会の公的殉教観を『イエズス会の百年像』（1640）からひもとく――日本の代表的な殉教者としてのカルロ・スピノラ像」（『キリシタン文化研究会』155号、2020年）p. 1-44。

15　Manuel de Castro, « Ferdandez de Saint-Gabriel (François) », dans Marcel Viller et al. (dir.), *Dictionnaire de spiritualité ascétique et mystique. Doctrine et Histoire*, Tome 5, Paris, Beauchesne, 1960-1964, col. 178-179. Ruth Kleinman, *Anne d'Autriche*, Paris, Fayard, 1993, p. 74.

16　Gabriele Greindl, „Die Briefe Maximilians I. und Elisabeths von Bayern an den chinesischen Kaiser im Jahr 1617", dans Renate Eikelmann（éd.）, *Die Wittelsbacher und das Reich der Mitte 400 Jahre China und Bayern*, München, Hirmer, 2009, p. 105-111.

17　ロションは、1625年以降のパリに移り、カトリックに関連する聖人図像の作品を多く作成した。トリゴーの扉絵は、ロションがパリの著名な出版業者セバスチャン・クラモワジーの依頼で作成したとされている。木村三郎、前掲書、p. 225.

18　ピエール・モランは、当時様々なラテン語著作をフランス語訳した人物であるが、トリゴーの『日本殉教史』の翻訳の直前の仕事として、アントン・スケットによる『とこしえの生への道（*Chemin de la vie éternelle*）』を翻訳していた。*Le Chemin de la vie éternelle* [...], *translaté par le R.P. Pierre Morin* [...], *déclaré par images de Boëce a Bolswert*, Antwerp, 1623. 引用該当箇所は、p. 6-7.

19　Christian G. Lynda, *Theatrum Mundi : the History of an Idea*, New York ; London : Garland, 1987.; Fidel Rädle, „Gottes ernstgemeintes Spiel. Überlegungen zum welttheatralischen Charakter des Jesuitendramas," Franz Link, Günter Niggl（hrg.）, *Theatrum mundi : Götter, Gott und Spielleiter im Drama von der Antike bis zur Gegenwart*, Duncker & Humblot, 1981, p. 135-159.

20　Ann Blair, *The Theater of Nature: Jean Bodin and Renaissance Science*, Princeton N.J., Princeton Univ. Press, 1997, p. 159.

21　Ralph Dekoninck, « Du frontispice emblématique au frontispice théâtral dans les éditions anversoises au tournant des XVIe et XVIIe siècle », dans Wolfgang Harms（éd.）, *Polyvalenz und Multifunktionalität der Emblematik*, Frankfurt am Main, Peter Lang, 2002, p. 891-895.

22　Louis Trenard, *De Douai à Lille… Une université et son histoire*, Lille, Presses Universitaires du Septentrion, 1978, p. 13-14.

23　木村三郎「ドゥエーとパリ」木村三郎前掲書、p. 238-242.

24　Carlos Sommervogel, *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*, *Bibliographie*, Bruxelles; Paris, Oscar Schepens; Alphonse Picard, t. 8, 1898, col. 237.

25　Ronnie Po-chia Hsia, « La questione del clero indigeno nella missione cattolica in Cina el Sedicesimo e diciassettesimo secolo », *Studia Borromaica. Saggi e edocumenti di storia religiosa e civile della prima età moderna*, 2006, 20, p. 185-194; David E. Mungello, *Curious Land: The Jesuit Accomondation and the Birth of Synology*, Honolulu, University of Hawai'i Press, 1985, p. 47.

26　この旅の詳細は、Edmond Lamalle, « La propagande du Nicolas Trigault en faveur des missions de Chine（1616）», *Archivum Historicum Societatis Iesu*, 1940, IX, fasc. 1（17）, p. 49-120.

27　俗語への飜訳出版を除き、ラテン語著作のみ数え上げても、トリゴーには38もの異なる出版物が数え上げられると言う。その著作の影響力がうかがえる。Luke Clossey, *Salvation and Globalization in the Early Jesuit Missions*, New York, Cambridge University Press, 2008, p. 200.

28　*Rei christianae apud Iaponios* Commentarius Ex litteris annuis Societatis Iesu annorum *1609. 1610. 1611. 1612.*, 1615.

29　1614年に実行された宣教師およびキリシタンの国外追放の措置を受けた退去だった。清水紘一『キリシタン禁制史』（教育社、1984年）p. 110-111. 追放の詳細に関しては、p. 113-118参照。右近の死の状況に関しては、川村信三『キリシタン大名 高山右近とその時代』（教文館、2016年）, p. 219.

30　Pedro Moréjon, *Relacion de la persecvcion qve uvo*（sic, =huvo）*en la yglesia de Iapon: y de los insignes martyres, que gloriosamente dieron su vida en defensa de n*［*uest*］*ra sante Fe, el año de 1614. y 615*, México City, Ioan Ruyz, 1616.

31　Pedro Moréjon, *Relacion de la persecvcion qve uvo*（sic, =huvo）*en la yglesia de Iapon*, Zaragoza, Iuan de Larumbe, 1617. モレホンによる日本殉教者の報告については、以下に詳しい。結城了悟「ペドロ・モレホンの日本の殉教者に関する報告（1557-1614）」（『キリシタン研究』十五号、1974年）p. 304-305.

32　Haruko Nawata Ward, "Women in the Eyes of a Jesuit Between the East Indies, New Spain, and Early Modern Europe", dans Christina H. Lee（dir.）, *Western Visions of the Far East in a Transpacific Age, 1522-1657*, Burlington, Ashgate Publ., 2012, p. 117-135.

33　Luis Piñeiro, *Relacion Del Successo Que Tvvo Neustra Santa Fe En Los Reynos Del Iapon, Desde el ano de seyscientos y doze hasta el de seyscientos y quinze…*, Madrid: Por la viuda de Alonso Martin de Balboa, 1617.

34　Jacques Gernet, « *Della entrata della Compagnia di Giesù e Christianità nella Cina* de Matteo Ricci（1609）et les remaniements de sa traduction latine（1615）», *Comptes-rendus des séances de l année - Académie des inscriptions et belles-lettres, 147e année*, 1, 2003, p. 61-84.

35　この部分には頁番号はないが、ラテン語版・序文の二頁目にあたる。

36　この部分には頁番号はないが、フランス語版・序文の七頁目にあたる。

37　フランス語版・序文の七頁目。

38　Nicolas Trigault, *De Christianis apud Japonios triumphis*, 1623, p. 442-443,

39　George Ryley Scott, *The History of Torture throughout the Ages*,

London, Luxor, 1959, p. 171.

40　*Acts and Monuments*, 1563年の版 p. 1732, 1570年の版 p. 2269, 1576年の版 p. 1952, 1583年の版 p. 2056. この殉教伝に関しては、Tamaki Manabe, “John Foxe's "Oldcastle Controversy": Acts and Monuments”, *The Tsuda Review*, 63, 2018, p. 51-62; 指昭博『キリスト教と死――最後の審判から無名戦士の墓まで』（中央公論社、2019年）p. 147-148。

41　Elizabeth Evenden, Thomas S. Freeman, *Religion and the Book in Early Modern England: The Making of Foxe’s ‘Book of Martyrs’*, Cambridge, Cambridge University Press, 2011, p. 251-252.

42　*De persecutione Anglicana epistola, qua explican-tur aictiones, aerumna,* ［*et*］ *calamitates gravissimae, cruciatus etiam* ［*et*］ *tormenta* ［*et*］ *acerbissima martyria, quae Catholici nunc Angli ob dem patiuntur*, Rouen, George Flinton, 1581.

43　*De persecutione Anglicana libellus*, Paris, Thomas Brumena, 1582; *Ibid.*, Roma, Francisco Zanetti, 1582. パリでは、トーマス・ブルメナ本出版後に直ちにフランス語訳が刊行された。

44　*De persecutione Anglicana commentariolus*, Ingolstadt, Eder, 1582.

45　Mirosława Hanusiewicz-Lavallee, “krucieństwo kacyrskie przeciw katolikom w Anglijej, czyli polski głos w sporze o męczeństwo”, *Odrodzenie i Reformacja w Polsce,* 56:37, 2012, p. 37-60; Thomas MacCoog, “Constructing Martyrdom in the English Catholic Community, 1582-1602”, dans Ethan Shagan（ed.）, *Catholics and the Protestant Nation: Religious Politics and Identity in Early Modern England*, Mancheste; New York, Manchester Univ. Press, p. 95-127.

46　*Praesentis ecclesiae anglicanae typus*, Reims, Jean Foigny, 1582. Anne Dillon, *The Construction of Martyrdom in the English Catholic Community, 1533-1603,* Aldershot, Ashgate, 2002, p. 123.

47　Richard Verstegan, *Briefve Description des diverses cruautez que les Catholiques endurent en Angleterre pour la foy*, 1583.

48　Frank Lestringant, *Lumière des martyrs : essai sur le martyre au siècle des réformes*, Paris; Genève, Honoré Champion, 2004, p. 250.

49　Richard Verstegan, *Briefve Description des diverses cruautez que les Catholiques endurent en Angleterre pour la foy*, 1583, pl. 3. に添えられた説明文。

50　Frank Lestringant, « Le *Théâtre des cruautés* de Richard Verstegan（1588）. Une scénographie de la Contre-Réforme », dans Camille Dumoulié（dir.）, *Les théâtres de la cruauté hommage à Antonin Artaud*, Paris, Éditions Desjonquères, 2000, p. 87（86-96）.

51　Peter Burschel, *Sterben und Unsterblichkeit zur Kultur des Martyriums in der frühen Neuzeit,* München, Oldenbourg, 2004, p. 202.

52　Gauvin Alexander Bailey, *Between Renaissance and Baroque: Jesuit art in Rome, 1565–1610*, Toronto; Buffalo; London: University of Toronto Press, 2003, p. 155-156.

53　Paul Arblaster, *Antwerp and the World Verstegan*, Leuven, Leuven Univ. Press, 2004, p. 23.

54　稀書複製会編『吉利支丹退治物語 下』（米山堂、1929年）21頁、国立国会図書館デジタルコレクション、保護期間満了資料。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1187545/12（2020年1月8日閲覧）。

55　岸本恵実「キリシタンの廃教を表す『ころぶ（転ぶ）』という言葉について」（『アジア文化研究』35号、2009年）p. 111-123。

56　ラテン語版、p. 198、フランス語版、p. 247。

57　ラテン語版 p. 199-200, フランス語版 p. 248-249。

58　ラテン語版 p. 202, フランス語版 p. 253。

59　ラテン語、p. 253, フランス語 p. 315。

60　Jan Marco Sawilla, *Antiquarianismus, Hagiographie und Historie im 17. Jahrhundert: zum Werk der Bollandisten: ein wissenschaftshistorischer Versuch*, Tübingen, M. Niemeyer, 2009, p. 126.

61　Leif Holm Monssen, “Rex Gloriose Martyrum: A Contribution to Jesuit Iconography”, *The Art Bulletin*, 63（1）, 1981, p. 131.

62　例えば、ラウレンティウス・スリウス（Laurentius Surius, 1523-1578）により書かれた、『聖人伝について（*De vitis sanctorum*）』（Venice, 1581年）第1巻、309r.-310r頁には「彼らは拷問されたと言われているが、その方法ははっきりしない。」とある。

63　Thomas Buser, « Jerome Nadal and Early Jesuit Art in Rome », dans *The Art Bulletin*, 58（3）, 1976, p. 428.

64　この全ては現存していない。Alexandra Herz, “Imitators of Christ: The Martyr-Cycles of Late Sixteenth Century Rome Seen in Context”, *Storia dell’arte*, 62, 1988, p. 53-70.

65　Dominique Julia, « L’Eglise post-tridentine et les reliques; tradition, controverse, et critiques（XVIe-XVIIIe siècle）», dans Philippe Boutry, Pierre Antoine Fabre, et Dominique Julia（éds.）, *Reliques modernes : cultes et usages chrétiens des corps saints des Réformes aux révolutions*, vol. 1, Paris, Éditions de l’École des hautes études en sciences sociales, 2009, p. 69-120.

66　ロトンド教会の壁画連作の版画化は、*Ecclesiae Militantis Triumphi sive Deo Amabilium Martyrum Gloriosa pro Christi Fide Certamina*, Roma, 1585.（初版は1583）; ドイツ・ハンガリー学校の壁画連作の版画化が、*Beati Apollinaris martyris primi Ravennatum epi res gestae*, 1586.

67　これに関しては、広範な研究が存在して枚挙にいとまがないが、代表的な研究として、Thomas Buser, “Jerome Nadal and Early Jesuit Art in Rome”, *The Art Bulletin*, 58（3）, 1976, p. 424-433; Antonio Vannugli, « Gli affreschi de Antonio Tempesta a S. Stefano Rotondo e l’emblematica nella cultura del Martirio presso la Compagnia di Gesù », *Storia dell’arte*, 48, 1983, p. 101-115; Kirstin Noreen, “*Ecclesiae militantis triumphi*: Jesuit Iconography and the Counter-Reformation”, *Sixteenth Century Journal,* XXIX, no. 3, 1998, p. 689-715.

68　Hitomi Omata Rappo, *Des Indes lointaines aux scènes des collèges : les reflets des martyrs de la mission japonaise en Europe*（*XVIe -XVIIIe siècle*）, Münster, Aschendorff, 2020, p. 324-336.

69　Idem., p. 336-344.

70　Claude-Louis Combet, “Préface”, dans Idem.（éd.）, *Gallonio Antonio, Traité des instruments de martyre et des divers modes de supplice employés par les païens contre les chrétiens*（*1591*）, Grenoble, J. Millon, 2002, p. 10.

71　本書はフェリペ四世に献呈されており、内容的にはカトリックのスペインによる南ネーデルラント支配を肯定することを目的としていた。しかし、一部表現（君主が狩りのような趣味に耽溺することをあげつらったもの）が、フランス国王ルイ十三世を意識して嘲笑した表現であるとされた。Robert Bireley, *The Jesuits and the Thirty Years War: Kings, Courts, and Confessors*, p. 68; Robert Bireley, *The Counter-Reformation Prince: Anti-Machiavellianism or Catholic Statecraft in Early Modern Europe*, Chapel Hill, London, The University of North Carolina Press, 1990, p. 162-187.

72　1626年には、リシュリュー枢機卿の政策を批判する二つのパンフレット『政治のミステリー（*Mysteria politica*）』、『王への警告（*Admonitio ad Regem*）』が出版されて、その作者はイエズス会士であるとされ、イエズス会は再び糾弾されている。こ

うした状況に対し、同時代のイエズス会士フランソワ・ガラッス（François Garasse, 1584-1631）は、フランスのイエズス会は「迫害」を受けているとすら述べている。Christian Jouhaud, « *La doctrine curieuse des beaux esprits de ce temps* ou la méthode de François Garasse », dans Luce Giard et Louis de Vaucelles,（dir.）, *Les Jésuites à l'âge baroque :（1540-1640）*, Grenoble, Jérôme Millon, 1996, p. 243-260.

73　この作品に関しては、以下に詳しく分析されている。濱田明「ドービニエの日本――『世界史』と『サンシー殿のカトリック告白』を通して」（『Gallia. 大阪大学フランス語フランス文学会』47 巻、2000 年）p. 37-43; Christian Biet, *Tragédies et récits de martyres en France（fin XVIIe-début XVIIe siècle）*, Paris, Classiques Garnier, 2009, p. 41.

74　上記濱田明論文における飜訳を一部参考にした（p. 42）。*Confession catholique du Sieur de Sancy*, 1598, p. 91.

75　Hitomi Omata Rappo, *Des Indes lointaines aux scènes des collèges*, 2020, p. 263-268.

76　Daniel V. Botsman, *Punishment and Power in the Making of Modern Japan,* Princeton, NJ, Princeton University Press, 2013, p. 167.

77　David El Kenz, *Les bûchers du roi : la culture protestante des martyrs（1523-1572）*, Seyssel, Champ Vallon, 1997, p. 51-52. 指昭博、前掲書、p. 129-138.

78　Hitomi Omata Rappo, *Op. cit.*

79　川田玲子『メキシコにおける聖フェリーペ・デ・ヘスース崇拝の変遷史』（明石書店、2019 年）p. 121-124。

80　拙稿「日本の『殉教』とグローバル・ヒストリー――日本が西欧の歴史に内在化する時」（日仏東洋学会『通信』42、2019 年）p. 38。

81　拙稿「聖性の創り方――いわゆる日本二十六聖人の列福過程（1627）」（名古屋大学文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター編『HERITEX vol. 3』、2020 年（2019 年号）p. 310-341。

82　Rady Roldán-Figueroa, "Father Luis Piñeiro, SJ., the Tridentine Economy of Relies, and the Defense of the Jesuit Missionary Enterprise in Tokugawa Japan", dans *Archiv für Reformationsgeschichte : Archive for Reformation History*, Volume 108, Issue 1, 2018, p. 209–232.

83　トリゴー『日本殉教史』ラテン語版 p. 381-382、フランス語版 p. 469-470 に見られる第五章の序文で説明される。

84　George Harold Dunne, *Generation of Giants; the Story of the Jesuits in China in the Last Decades of the Ming Dynasty*, Notre Dame, Ind., University of Notre Dame Press, 1962, p. 178.

85　*Epistola R. P. Nicolai Trigavtii e Societate Iesv de felici sva in Indiam nauigatione : itemque de Statu rei Christianae apud Sinas et Iaponios*, Coloniae Agrippinae, Apud Ioannem Kinchium, 1620. これは、1618 年 12 月 29 日付けのゴアで書かれた書簡である。しかし、このラテン語の書簡は入手できなかったため、後年出版されたドイツ語訳を利用した。"Copia eines Schreibens von dem Ehrmürzigen Herrn P. Nicolao Trigautio/so er den 29. Decembris Anno 1618, zu Goa datirt/auß dem Lateinischen verteutscht", IN: *Indianische Raiß von dreyen Ehrwürdigen Priestern der Societät Jes*u, Augsburg, Sara Mangin Wittib, 1620, p. 57-58（51-58）.

86　ラテン語版 p. 460-465, フランス語版 p. 569-573。

87　Hitomi Omata Rappo, "Death on the Cross; the Beatification of the Twenty-Six Martyrs of Nagasaki（1627）and the Iconography of the Crucifixion", dans Fernando Quiles García et al.（éd.）, *A la luz de Roma. Santos y santidad en el barroco iberoamericano,* vol. 3, Roma, Roma Tre-Press, 2020, p. 123-144.

88　ラテン語版、p. 7-9、フランス語版、p. 9-11。

89　Joseph Wicki（ed.）, *Historia de Japam*, vol. V, Lisboa, Biblioteca Nacional, 1984, p. 201–205. Gaspar Coelho et Luís Fróis, *Copia di due lettere annue scritte dal Giapone del 1589. & 1590.,* Milan, Pacifico Pontio, 1593, p. 61–71. また、この奇跡譚を扱った一次資料についての調査に、川口敦子「ヨーロッパの図書館・文書館の長崎関係キリシタン資料」（若木太一編『長崎・東西文化交渉史の舞台――ポルトガル時代・オランダ時代』勉誠出版、2013 年）p. 106-127。

90　フランス語版、p. 5。

91　ラテン語版、p. 480、フランス語版、p. 595。

92　ラテン語版、p. 484、フランス語版、p. 598。

93　前註 85 参照。

94　拙稿、前掲論文、「イエズス会の公的殉教観を『イエズス会の百年像』（1640）からひもとく――日本の代表的な殉教者としてのカルロ・スピノラ像」。

図版リスト

図 1　Nicolas Trigault, *De Christianis apud Japonios triumphis*, München, 1623, p. 362. Jesuitenbibliothek Zürich, AOR.02.T.D44.

図 2　John Foxe, *The Unabridged Acts and Monuments Online*, 1563, p. 1732.（HRI Online Publications, Sheffield, 2011）

図 3　Robert Persons, *De persecutione Anglicana Libellvs*, Roma: Giorgio Ferrari, 1582, 本の末尾に追加されている図像の 4 枚目。Harvard Houghton Library, Br 1735.162.

図 4　Richard Verstegan, *Theatrum crudelitatum haereticum nostri temporis*, Antverpi, Hadrianum Huberti, 1604, p. 73. Harvard Houghton Library, C4481.8.5.

図 5　Niccolo Circignani, *Ecclesiae anglicanae trophaea*, 1584, p. 31. Harvard Houghton Library, Typ 525 85.285.

図 6　稀書複製会編『吉利支丹退治物語　下』（米山堂、1929 年）p. 21、国立国会図書館デジタルコレクション、保護期間満了資料。https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1187545/12（2020 年 1 月 8 日閲覧。）

図 7　Nicolas Trigault, *De Christianis apud Japonios triumphis*, p. 250.

図 8　Nicolas Trigault, Histoire des martyrs du Japon, 1624, p. 227. Harvard Houghton Library, Jpn 186.23.5.

図 9　ローマ、ステファノ・ロトンド教会壁画（Basilica di Santo Stefano Rotondo）、著者撮影。

図 10　Niccolo Circignani, *Ecclesiae militantis triumphi*, 1585, p. 20. Harvard Houghton Library, Typ 525 85.285.

図 11　Nicolas Trigault, *De Christianis apud Japonios triumphis*, p. 464.

図 12　Nicolas Trigault, *Histoire des martyrs du Japon*, 1624, p. 468.

図 13　Nicolas Trigault, *De Christianis apud Japonios triumphis* 扉絵 .

図 14　Nicolas Trigault, *Histoire des martyrs du Japon* 扉絵 .